



男58歳、先輩方から見れば、まだハナたれ小僧。働き盛り、遊び盛りなど、形容詞があるが、ここ数年フオーローの風も受け、若干気の緩みが出たせいとか、突如、盆栽や鉢に、その結果、水石にまではまり始めた。いわゆる侘び寂(さび)の世界だが、自分自身そこまで境地には到底遠く、単に

足を一歩踏み入れたに過ぎない。先人たちが30年、40年、生涯かけた思い入れを見れば、まさにハナたれ小僧である。

黒松をいじれば奥が深すぎ、鉢に手を出せば贋作も

おぼろ月

向後 賢司

見抜けない。そんな苦境時に、たまたまオークションで風変わりな石を落札した。色は鉄のようで、見るからに硬そうで、周りには薄く深い溜まりがあり、何よりも手ざわりがよい。鉄のオブリエのようなのである。価格

は2000円だが、童心に返った喜びで、この時はまだ水石の虜になるとは思ってもしなかった。

幼い頃、よく川原や海、山に行った時、わけの分からない石を拾ってきた記憶

がある。何の変哲もない石を、宝物のように抱えてきたものだ。文献によると、信長が寵愛した「末の松山」や後醍醐天皇が珍重した「夢の浮橋」と呼ばれる名石は、昔中国から来た由來石である。われわれ鉄鋼

界も多くの鋼材が中国より入っているが、信長や後醍醐天皇の耳に入ったらどんな言葉が返ってくるだろう。「鉄は国家なり」忘れてはならない言葉である。

正月休み、無理やり友人二人を引っぱり、犬吠崎灯台近くの長崎海岸へ採石に行き、持ちきれないほどの石を集めた。時間も経過したので帰ろうとした時、直径40ほどの石が目に残り、思わず立ち止まった。海原を照らす太陽にも見え、また荒野を包む月の優しさにも感じたが、私は「おぼろ月」と命名した。持ち帰ったことは申すまでもない。

(松山鋼材社長)